

〔研究余滴〕

「剣岳信仰」をめぐる若干の考察

米原 寛

はじめに

明治40年、銅錫杖頭と鉄剣が剣岳頂上において発見された。以来100年、平成19年は記念すべき「剣岳開山100年」の年にあたる。これを記念して国土地理院では「剣岳測量100年記念」として記念事業を展開した。こうした動きに呼応して、東映では「剣岳点の記」と題する映画化が企画され、現在、撮影の最中である。一方、立山信仰研究においても、立山信仰と剣岳に関して、改めて注目されることとなった。福江充

が国土地理院の記念誌に「剣岳をめぐる立山信仰」¹⁾と題した小文を寄せている。剣岳を立山信仰の視点からこれまでの学説を踏まえて纏められた概説文である。

本稿では、銅錫杖頭・鉄剣の発見から生じた疑問、「何時の時代、いかなる人が遺して去りしものか」について大胆な推察を加えての考察の結果を提案することとしたい。

1. 銅錫杖頭・鉄剣の発見から生じた疑問

明治40年7月13日、柴崎芳太郎等旧参謀本部陸地測量官の剣岳登頂によって銅錫杖頭と鉄剣が発見された。この発見は、「立山は十世紀初頭頃までには開山され、天台教団系の宗教者たちの一拠点となっていたが、これらの遺物はそれ以前に山岳修行者が立山に入山していたことを示している。」というこれまでの大方の説の根拠とされたものである。

『山岳』第三年三号に載せられた「越中剣岳先登記」²⁾には、「一行がこの絶頂において非常に驚いたのは、古来、いまだかつて人間の入りしことのないこの山の巔きに、多年風雨にさらされてなんともいえぬ古色を帯びた錫杖の頭と鏃と発見したことである。」と当時の興奮を記している。そして、文を続けて「何時の時代、いかなる人が遺して去りしものか、槍の持主と錫杖の持主は同一のひとか、もし違っているとすれば同時代に登りしものか、別時代に登りしものか、これらはすこぶる趣味のある問題で、もしさらに進んで何故にこれらの品物を遺留し去ったものではなく、風雨の変に逢うて死んだものとすれば、少なくとも骨の一片位はなくてはならんはずだが、品物は何処か溪間

へでも吹飛ばされたものか、この秘密は恐らく誰にも解くものはあるまい」と素朴な疑問を提起している。当初から何時の時代に、誰が登り置いていったのかの疑問があったのである。

この疑問は立山剣岳の登山史・信仰史上重要な課題である。これらの課題について若干の試論を巡らすこととしたい。

(1) 鉄剣と錫杖頭は奉納品

「この二品は一尺五寸ばかり隔ててありました。」（『越中剣岳先登記』）という発見された状況からみると、錫杖頭と鉄剣との間隔が約45センチメートル、両品とも同じ方向を向いていたという。

鉄剣は、長さが22.6cm、幅2cm、厚さ1.5cm、当初から槍の穂先あるいは鏃ではないかと疑問視されている点もあるが、身の部分に帯状の細長い突き物がみられることから、やはり剣ではないかと推測される。この鉄剣は身のみで柄が遺されていない。（図1・写真参照）一方、錫杖頭（図2）についても、柄の部分が遺されていない。柄の部分が遺っていない理由として、あくまで推測の域を出ないが、杖部が木製の場合

腐蝕などで損逸したのか。しかし、錫杖頭に差し込んだ柄の部分の腐蝕などの残痕は、発見当初の様子を記した記述やスケッチにはうかがえない。鍛鉄製の柄であれば、取り外したのかである。また、輪に懸けられた5個の環（リング）が一つも遺されていないことをみると、奉納の時期は製作時期から一定の時間が経過していたとも考えられる。このようにみえてくると、登頂に必要な錫杖とは別に、当初から何らかの理由により錫杖の頭部のみ奉納する意図を有し持参していたのではないか。大日岳頂上に近い行者窟からも、おそらくは奉納されたとみられる平安時代前期の製作と推定されている双竜飾錫杖の頭部のみが発見されている³¹ことも考え併せてみる必要がある。

この二品が同時期か或いは時期を異にしているかはわからないが、いずれにしても奉納のため山頂においたと考えたい。

なお、剣岳山頂に奉納する品は、錫杖頭よりは鉄剣がふさわしい。なんとなれば、剣岳の山名が峨々たる峰の景観に加えて、大岩山不動明王が剣岳の本地仏とするならば、やはり剣を奉納するのが本意であったと考えられる。¹¹

(2) 奉納者は修験者

剣岳山頂に奉納されたと考えられる鉄剣と錫杖頭は、両品とも修験者が山林に分け入る際に携行する法具である。剣は修験道の本尊とされる不動明王の持物であり、修験者が調伏などの祈祷や、入峰を控えての採燈護摩の前作法（法剣の作法で用いられる）として用いられるものである。また、錫杖頭は、木や鉄の柄を装着し僧侶や修験者が杖としたもので、修験道にとって基本用具であり、山中で六輪を振り鳴らして獣や蛇を追い払う杖で、本来箱笈などとともに修験道所用の具である。なお錫杖の霊力については、『今昔物語集』「越中国書生妻墮立山地獄語第八」に「僧ヲ以テ錫杖供養セサセ、法華経講ジサセナド為ル程、地獄ノ焰宜ク見ユ³²」との記述からもうかがえる。

平安時代に入って、山林抖擻を行う修行者が次第に多くなっていったが、霊山山頂や霊山を遙拝する適地

に法華経・鏡・錫杖・刀剣など奉納品を埋納する儀礼は、いわゆる修験道の影響によるものであり、奉納、埋納の時期は、『山岳信仰の遺宝』⁶¹「Ⅲ 奉納の品じな」の項にみると、山岳信仰の霊山における埋納品（出土品）の大半が平安時代後期・12世紀以降であることが明らかであり（表1）、また、埋納・奉納の主は修験者であると考えられる。

なお、修験者とは何故に登攀が困難な剣岳山頂に登ったのであろうか。和歌森太郎は本来、「法華経こそ即身成仏を化導する経典で、山岳の行者として禅定修行につとめるものは、法華経読経誦を続けていた⁷¹」という。残念ながら、今の時点で山頂に遺物が確認されたのは錫杖頭及び鉄剣のみで、「法華経持経者」が「如法経修行」の実践として書写した法華経を奉納したという痕跡をみるができない。福江充はこの点について「おそらく、これを遺した修行者は決死の覚悟、いわゆる捨身修行として剣岳に挑み、錫杖頭も初めから奉納品としてもちこんだのであろう」と推測している。⁸¹

(3) 剣岳山頂への鉄剣と錫杖頭の奉納登山の時期は平安後期

剣岳への奉納登山の時期は、これまでの大方の説は、錫杖頭の製作年代（九世紀初頭）を根拠としている。⁹¹この時期に、剣岳が聖地とみなされ、修験道所用の具の奉納の対象となる山として認識されていたのだろうか。

このことを考えるに当たっては、①霊山の開山の時期、②修験道の成立時期、③経塚築造など埋納の時期の点について検討してみたい。

① 霊山の開山の時期

開山については多くの場合伝承しか残されていないが、文献で確認できる事例としては、白山の開山は天長9年・832年であると「白山記」は記している。¹⁰¹戸隠山の開山は、天曆年間、すなはち10世紀の半ばごろの登頂を告げている。¹¹¹ちなみに立山の開山は9世紀末から10世紀初頭にかけてと云われている。出羽三山の開山は9世紀後半である。¹²¹

このようにみえてくると、大方、靈山の開山は9世紀中頃以降10世紀にかけてと考えられる。

② 修験道の成立

「扶桑略記」によれば、吉野の金峰山を巡って修行した東寺沙門の日藏禪師が禪定のため金峰山に入ったのは、延喜16年(916年)春2月と記している。¹³⁰ 修験道を象徴する藏王堂が初めて吉野に建てられたのは、平安初期の延喜天曆(915～956、10世紀前半)の頃といわれる。¹⁴¹ また、平安中期の著作である「新猿蓑記」¹⁵¹には、「山伏修行者」が巡った山々として熊野・金峰・越中立山・伊豆走湯・根本中堂(比叡山)等々をあげている。そして、修験道というべきものが、一応の成立を遂げるのは、聖宝(832～909年)や増譽(1032～111年)の活躍の時代、すなわち、平安中期から末期にかけての時代、10世紀以降とされている。¹⁶⁰ この他、10世紀から11世紀初頭に成立した清少納言の『枕草子』の中に、「山は」と題して多くの山をあげているなかに、「いりたちやま」と立山の名をあげている。(これらの山は靈山という意味ではなく、万葉集にその名のあらわれた山々という意味、いわば文学上の名山であるが。)¹⁷¹ 1179年の成立といわれる『梁塵秘抄』にも「勝れて高き山」として白山、「験仏の尊き」は東の立山¹⁸¹とみえている。

このように、修験者が山林抖擻を行うなかで、劍岳の登頂を果たしたとすれば、東密系や台密系の成立と修験者の山林抖擻を実践し始める時期は少なくとも十世紀以降となる。

③ 経塚築造など埋納の時期(劍岳山麓の経塚)

修験者や修行者が劍岳及びその周辺に修行の場を求めて入山しはじめた時期は、靈峰劍岳に対する法華経の功德に祈願する納経という行為が行われた山麓地域の経塚築造の時期と極めて深い関係を考えなければならぬ。

□経が峰の経塚 大岩山日石寺の背後に、経が峰と呼ばれる山がある。この山の頂上にある経塚から仁安2(1167)年8月10日の銘をもつ銅板製の経筒

と、和鏡一面とが出土した。¹⁹⁰ 12世紀、大岩の地を中心に活動した立山修験者が遺した遺跡・遺物であろう。また、上市黒川円念寺遺跡の経塚群に埋納された経筒などの多くの遺品は概ね12世紀頃のものである。

□円念寺遺跡 この遺跡は、黒川上山古墓群の南約300mに位置し、通称「円念寺山」と呼ばれる尾根上標高85m前後に占地する。全国屈指の大規模経塚群である。出土遺物の性格やほぼ同時期に営まれ始めた黒川上山古墓群の遺構構造との違いから、これらは12世紀後半(平安時代末期)に造営された経塚群である。²⁰⁰

1-1号石攪柳・壇状集石から出土した金属製独鈷杵(平安時代後期、実用品、11世紀まで遡りうる、本経塚群造営に当たり強烈な意識の存在を示している)と銅磬(12世紀後半を降らない)が出土している。その他経塚は17の塚を数える。これらの経塚からの出土品には、1186年の年紀のある3号経塚出土の珠洲経筒外容器、珠洲焼編年I期の範疇²¹¹に入る7-2号経塚出土の珠洲四耳壺・珠洲片口、10号経塚出土の珠洲壺、11号経塚出土の珠洲壺・片口、12世紀前半の造作とみられる銅鏡、短刀などがある。

なお、経塚からの出土品のなかで、国内で最古の紀年銘をもつものは、金峰山経塚出土の金銅経筒で、寛弘4(1007)年藤原道長の自筆の法華経など15巻を銅篋に入れて埋納したもの²²⁰である。

国内における経塚築造の始まりは10世紀末か11世紀以降であると考えられる。

以上のことから劍岳山頂に遺された錫杖頭・鉄劍の奉納された時期については、たとえ錫杖頭の製作時期が九世紀初頭としても、製造され、錫杖頭が行者の手に渡り、はるばる越中立山までに至るにはそれなりの時間を必要とするものである。したがって製作時期がそのまま劍岳登頂の時期とするには無理であろうと考える。また、①から③の検討により、修験者や修行者が劍岳及びその周辺に修行の場を求めて入山しはじめ

た時期は、平安時代後期、11世紀末以降と考えたい。
なお、このことは、山岳信仰の霊山からの埋納品（出

土品）の大半が平安時代後期・12世紀以降であることをもってしても推測できる。

2. 「劔岳信仰」と大岩不動明王

「劔岳信仰」という語は未熟であるが、その内容を挙げると、一つには遙拝信仰としての経塚築造にみられる埋納、いま一つには、東密系の修験者による大岩の磨崖仏不動明王信仰である。経塚築造にみられる埋納については前述した円念寺遺跡でみたとおりである。

劔岳の山名は、あたかも劔を立てたような景観ゆえであり、また神の顕ち現れる山の意から名付けられたものであろう。そして、大岩の地に不動明王を磨崖仏として刻んだのは、不動明王の劔の魔を払う力に仏の霊異を感じ、背後に聳える巖がたる峰の名前を劔としたのでなかろうか。広瀬誠は「劔の本地仏は不動明王で、劔の山容はさながら不動明王の神聖な劔と視ぜられたのであろう²³⁾」と言っている。たしかに、劔岳の山名は、劔を立てたような景観ゆえであったといえるが、立山に密教が入り込む前にも劔岳信仰が存在していたこと、すはわち劔岳にうしはきいます神を招く神社、神渡神社と日置神社の存在があったことも考慮にいれる必要があるだろう。

(1) 神渡神社と日置神社の存在

劔岳を真正面に観ることのできる上市町、立山町北部の地に古代の劔岳信仰をうかがわせる神社がある。神渡神社と日置神社である。

神渡神社について史書を見ると、『神明帳考證』巻六²⁴⁾に、「神度神社 今疑森尻歟、神渡劔、古事記云、大刀名謂大壘、亦名謂神度劔、日本紀云味耜高彥根神、抜其帶劔大葉苜、此云我里、亦名神度劔」、と記されている。この趣意を「劔を帯びた神が渡りくる神社」との解釈が許されるならば、神渡神社は劔岳から神が渡りくる神社と考えられる。東方間近に劔岳を仰ぐ地に位置する神渡神社は、まさしく劔岳を信仰する在り古代人のこころの拠り所ではなかったろうか。

日置神社については、柳田国男は「日置」は「日招」

と同義であるとされた。日本書紀では山彦海彦の段に「風招」の語があり、古代では招くことをヲクといい、尾張国風土記の吾縵郷（あつう）の条により解釈すると、日置は曲部の名であり、日置部の職能は神の所在を知ること、すなはち「神を招（お）ぐ」ことである。また、松前健は「神社に、日すなわち神を招き入れるものとしての氷木、つまり千木をみると、これが建築学上必要以上に高くなっているのは、天すなわち日から神を招き入れる信仰上の意味も元からあったからであろう」と指摘している。²⁵⁾ すなはち、劔岳にうしはきいます神を招き祀るのが神渡神社と日置神社であった。この他、『和漢三才図会』（江戸時代正徳期の編纂）に載せられた「立山開山」の記述に「劔岳の刀尾天神」の文言があり、劔岳の本地仏は不動明王であり、垂迹神は刀尾天神としている。この「劔岳の刀尾天神」の文言は、劔岳遙拝に恰好の場所にある刀尾天神を祀る太田本江の刀尾神社（神宮寺である刀尾寺）、岩倉寺雄山神社末社の存在を反映していると考えられる。

劔岳は古代においては神の山であり、遙拝信仰の対象でもあったのであろう。大伴家持の歌「太刀山に降り置ける雪を常夏にみれども飽かず神からならし」に詠まれた山は、まさしく、雄山ではなく劔岳ではなかったか。夏の劔岳には雪はなく、従って、白く見えることもない。しかし、都人は高山や霊山には白雪のイメージがあり、夏には雪がない加賀の白山においても同様の発想で「シラヤマ」と名付けられたのであろう。

大伴家持が眺望したと思われる、北陸道から立山連峰をみると、雄山は大日岳に隠れて見えず、劔岳がひとときわ高く鋭く天に聳え、あたかも劔を立てたような景観である。太刀、「夕チ」は、切り立った山、断ち切れた山という解釈もあり、柳田国男は「夕チ」は神の顕ち現れる山の意であると考えたのである。『万葉

集』の相伴池主の歌の中に、「神ながら、御名に負はせる、白雲の、千重を押し分け、天そそり、高き立山」²⁶¹と詠まれており、この対象となる峰は、今にいう雄山ではなく劍岳であったろう。

広瀬誠も『立山黒部奥山の歴史と伝承』の「劍岳の地名をめぐる」の中で、「万葉集のタチヤマは立山連峰の総称であろうが、その景観の中心はやはり劍岳であったらう²⁷¹」と記している。高瀬重雄も「平野からの遠望では、雄山の峰を指呼するのはむしろ困難であって、劍岳の雄姿こそ最も峨々といして印象的である。²⁸¹」と述べている。

立山信仰史の初期の段階では、劍岳が信仰の対象であったが、平安時代中期以降室堂平を中心とする立山信仰が展開するようになって、劍岳に対する原初的な意識は継続され、雄山神社頂上社殿の祭神として「向かって右座に劍岳の神とされる“とうのおしん”刀尾神を、向かって左座に雄山の神とされる雄山神を祀っている。」²⁹¹、また、社殿も劍岳を望む方向で建立³⁰¹されていたのであろう。

このような神の皇（うしはき）います聖山としての劍岳の信仰は、平安時代に入ると、真言・天台宗の影響により、神の山から仏が止住する山となり、新たな展開をみることになるのである。

(2) 大岩山磨崖仏不動明王成立の時期と意義

日石寺の磨崖仏不動明王の造作の時期は、その様式手法から藤原時代末期（12世紀末頃）であることは、既に京田良志が「大岩不動の系譜」³¹¹で詳細に論及している。

京田良志によれば、大岩不動明王の図像学上の特質をみると、一、頭頂に蓮華を按ずること、（頭頂蓮華相）二、頭髪の端がからんで左肩に垂れること（弁髪相）、三、両眼が同じく円状に開かれていること（両眼諦観相）、四、上歯がその両端の牙と共に下唇をか

むこと（上歯嚙下唇相）の四つの特徴がみられる。これら四つの相を兼備した遺例は多くないという。これら四相を兼備した作風は貞観時代に多くみられ、藤原時代になると図像は急激に自由に展開し、多種多様の像が作られてくる。これがつまり円珍以後の台密系不動明王の展開である。しかし、こうした動きのなかで四相兼備を保ち続けた像もいくらかは作られている。大岩不動もそれらに相当する像であり、少なくとも東密系の人々、或いはそれに浅からざる関係のあった人々によって、東密系の正統を示す必要があつて、貞観時代の四相兼備の像を取って作ったのである。何故であろうか。京田良志によれば、不動明王像のうち磨崖仏として作られたものは、全国的にも少なく、まして、四相兼備の図像はほとんどみられず、日石寺磨崖仏より古い様式を示すものは一跡もないという³²¹）。このことは何を意味するものなのだろうか。

平安時代後期、東密系に先行して立山に入り込んだ天台系の密教が、山中他界思想にもとずき立山の地獄谷を活動理念の中心としている。天台宗の僧源信の著『往生要集』の地獄思想の影響のもとに、仏教説話集『本朝法華験記』（11世紀中期の成立）や『今昔物語集』（12世紀前半の成立）に立山地獄の景観や立山墮地獄の語を載せており、台密系ではこれらの説話集を広報媒体として、立山地獄を大きく喧伝し、ひいては地獄思想の形成に大きな役割を担わせたのである。おそらく、12世紀末頃に、大岩山磨崖仏不動明王を古様に彫造したのは、こうした天台系の大きな力を意識し、敢えて東密系を主張するためのものであったのではないか。その後、天台系が東密系を圧倒すべく、阿弥陀如来と僧形像を追刻したのであろう。立山山麓大岩の地において東密系と台密系の熾烈なる戦いが行われたと考えることができる。

3. 剣岳信仰と立山信仰

「剣岳信仰」とは、未熟な用語であるが、基本的には剣岳の遙拝により法華経の護持を祈願した信仰で、修行者・修験者の不動明王を信奉する信仰と重なり合うものであり、密教の、なかでも山林抖擻を重視する東密系、すなわち真言系の流れに位置する信仰である。山中回峰修行を行う修行者や修験者たちが大岩の地の巨石に不動明王を刻み、この地を拠点として活動していたのである。12世紀を降らない時期においてである。これに対して、「立山信仰」は、説話集や江戸時代に著された「立山開山縁起」や「立山曼荼羅」に示されたように、立山信仰の基本は、水蒸気爆裂火口を地獄と見立てた地獄信仰と、阿弥陀如来の来迎をイメージし、雄山と浄土山を阿弥陀浄土の世界に見立てた阿弥陀信仰から構成されている。特に立山地獄は、先述したように天台系の地獄思想の普及活動の拠点としての役割を担わされていたのである。

ところで、大岩山の磨崖仏不動明王を拠点に活動する東密系に先行して、室堂平を拠点に活動する台密系が立山山麓に入り込んだのは何時の時代からであろうか。

このことは立山開山の時期と深く関わっている。開山の時期は、天台座主康済が「立山建立」したとされる時期（康済の死去が昌泰2年、899年）のおおよそ9世紀中頃から9世紀末³³⁹とされる。また、随心院文書の佐伯有若の自著のある文書の紀年が延喜5年、905年³⁴¹も一つの目途となる時期である。このほか、『本朝法華験記』下の「第八十九越中国海蓮法師」³⁵¹に、「参向立山白山及余靈験、祈祷此事、難行苦行、断食断塩、誦此三品、総不得憶持」と記された越中人僧海蓮の死が天徳元年（957年）のことであるから、室堂平を拠点に活動する台密系が立山山麓に入り込んだのは時期は遅くとも10世紀頃とみることができる。なお室堂遺跡から立山町上末窯で焼成された10世紀初め頃の陶器杯の破片2点が出土しており、この時期に室堂平への修行者の進出があったことをうかがわせるものである。また、玉殿・虚空蔵両窟からも陶器と思われる出土品が確認されている。³⁶⁰このような時期の遺物が、雄山を遙拝する室堂平とその周辺の地から出土したことは、後に確立する雄山を中心とする立山信仰の成立を考える上で重要である。

4. 剣岳は前人未踏の山か

「江戸時代から明治時代にかけて、剣岳は地元の人々に地獄の山、或いは針の山として畏れられ、崇められており、古来、前人未踏の山、登頂不可能な山、登ってはいけない山、無理に登ると罰が当たって遭難する山などと信じられていた。特にその意識は立山禪定登山者を案内した衆徒の間で強く、剣岳を登山禁忌の山として登らない、登せないといった前人未踏の山風習が存在した³⁷¹」、その理由は剣岳はあまりにも急峻なため登攀が難しいとされた。

それでは何時の頃から「登ってはいけない山」となったのだろうか。「聖なる山であるがゆえに足で穢してはならぬ山との意識が生まれ、禁足地となったのでは

ないか。その時期は8世紀後半から9世紀とする」との説がある。³⁸¹しかし、錫杖頭・鉄剣奉納の時期との関係からこの説には無理があろう。

「越中剣岳先登記」の冒頭に「越中の剣岳は、古来全く人跡未到の剣山として信ぜられ、今や足跡殆んど遍かられんとする日本アルプスにも、この山ばかりは、何人も手を著け得ざるものとして」³⁹⁰と記している。しかし、その後文をつけて「事実然らざりしは前項をみるべし」とも記している。この「前項」とは、『山岳』三年三号の「雑録」の冒頭に「剣岳の最初登山者」の部分の指している。剣岳の最初登山者は、柴崎芳太郎等陸地測量部の一行ではなく、既に明治39年9月

に芦峯寺の佐伯某が鉱物採取のため剣岳登頂を果たしているというのである。また、田部隆次の「剣山登攀冒険談」¹⁰⁾にも「芦峯寺では、剣山の道案内を知れる者有之候へ共、秘傳として、漫に人に傳えず、極めて高價の案内料を食りて、希に道案内をなせしことあるのみなりし」と聞くところを記している。実際は、剣岳登頂を目指す登山者に対しては、芦峯寺の中語が高価な案内料をとって案内したというのである。決して剣岳登山はタブーではなかったのである。禪定登山以外の目的で剣岳に登ることもあったろうことは、剣岳山頂の近くに岩窟が存在し火を焚いた跡があることによっても推測できる。（「この絶頂の西南大山の方面にあたり、二、三間下の方に奥行六尺、幅四尺ぐらいで人の一、二人は路宿し得るような岩窟がある。この窟でいつか焚火したことがあると見え蘚苔に封ぜられた木炭の破片を発見した」）

しかし、禪定登山が目的の場合には「登る能わざる」山であったことも間違いないであろう。峻険にして容

易に登れない剣岳の景観が、台密系の喧伝する地獄の一景観として剣岳を「刀葉林」あるいは「刀葉樹」に見立てられたがゆえに登ることがタブー視され続けられていたのである。アメリカ・フリア美術館所蔵の13世紀半頃に成立したとみられる「地蔵菩薩靈驗記絵巻」の第2段の、詞書き「地蔵講結縁の人のかはりて苦を受給事」の絵に、剣岳が地獄の一場面として描かれているのである。また、「天台霞標」五ノ二「建地蔵会」¹¹⁾には、越中の僧延好が見た地獄のなかに「軀上刀山劔樹、痛苦難忍」との記述がある。「刀山劔樹」とは剣岳を地獄「刀葉樹」にみたてた表現である。「刀葉樹」の地獄とは衆合地獄に属し、生前の殺生・偷盜・邪淫などの罪を犯した者が墜る地獄である。このように、既に、平安時代末か鎌倉時代の初めには、剣岳は台密系のなかに取り込まれていたのである。その後、江戸時代の立山曼荼羅には、当然の如く剣岳は針の山、剣の山として描き込まれているのである。

まとめ

思いつくままに、剣岳に係る疑問について推測を記してきた。今後は、剣岳の登頂は、錫杖頭の製作年代からみた「奈良時代末あるいは平安時代初め」という説について、今一度現在の科学技術の力を借りて、製作年代を確定させることが、「剣岳信仰」を考える上

で重要ではなかろうか。それにしても、錫杖頭は立山を研究する人々にとって様々な夢を与えてくれる貴重な資料である。この後の一層の研究の成果を待ちたいものである。

〔註〕

- | | | |
|--|------------------------------------|--|
| 1) 福江充「剣岳をめぐる立山信仰」『地図中心』2008年6月、日本地図センター発行 | 和59年富山県教育委員会発行 | 7) 和歌森太郎編・山岳宗教史研究叢書I『山岳宗教の成立と展開』38頁 |
| 2) 『山岳』3年3号(明治41年10月発行)の雑録に掲載 | 4) 福江充『剣岳をめぐる山岳信仰』国土地理院発行記念誌にもあり)。 | 8) 福江充「剣岳をめぐる立山信仰」『地図中心』2008年6月、日本地図センター発行 |
| 3) 明治二十六年、河合磯太郎が大日岳頂上に近い行者窟から発見、『富山県の文化財』82頁・昭 | 5) 『富山県史』資料編・古代・895頁 | 9) 錫杖と鉄剣の製作年代が明治四十四年、高橋健自が『考古学 |
| | 6) 奈良国立博物館・開館90周年記念特別展図録 | |

- 雑誌』第一巻第七号でこの銅錫杖頭の製作年代を奈良時代末から平安時代初期（九世紀初頭）と推定。
- 10) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』248頁
- 11) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』249頁
- 12) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』250頁
- 13) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』185頁
- 吉野の金峰山を巡って修行した東寺沙門の日藏禪師が禪定のため金峰山に入ったのは、「扶桑略記」によれば、12歳のとき、延喜16（916）年春2月の条に、「昔於金峰山、入深禪定」と記されている。
- 14) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』892頁
- 15) 『富山県史』資料編・古代・895頁
- 16) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』223・230頁
- 17) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』200頁
- 18) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』901頁
- 19) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』259頁
- 20) 『黒川上山古墳墓発掘調査第7次調査概報 円念寺山遺跡』
- 21) 珠洲焼編年Ⅰ期とは、12世紀後半
- 22) 『役行者と修験道の世界』の図録、大阪市立美術館1999年の特別展「役行者神変 大菩薩1300年遠忌記念特別展覧会」
- 23) 広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』377頁
- 24) 「神明帳考證」巻六越中、『神祇全書』第一輯323頁・明治39年10月発行
- 25) 『立山町史』174、180、181頁
- 26) 『富山県史』資料編・古代・98頁、万葉集4003「立山の賦に敬み和ふる一首」
- 27) 広瀬誠『立山黒部奥山の歴史と伝承』377頁
- 28) 高瀬重雄『古代山岳信仰の史的考察』237頁
- 29) 立山教育委員会『立山町文化財調査報告書 第25冊 立山雄山山頂遺跡』1997年3月、13頁
- 30) 立山教育委員会『立山町文化財調査報告書 第25冊 立山雄山山頂遺跡』1997年3月、4頁
- 31) 京田良志「大岩不動の系譜」・『越中史壇』第14号14頁
- 32) 京田良志「大岩不動の系譜」・『越中史壇』第14号19頁
- 33) 『富山県史』資料編Ⅰ・古代・405頁
- 34) 『富山県史』資料編Ⅰ・古代・411頁
- 35) 『富山県史』資料編Ⅰ・古代・500頁
- 36) 立山教育委員会『立山町文化財調査報告書 第25冊 立山雄山山頂遺跡』1997年3月、11頁
- 37) 『山岳』3年3号（明治41年10月発行）の雑録に掲載
- 38) 立山教育委員会『立山町文化財調査報告書 第25冊 立山雄山山頂遺跡』1997年3月、14頁
- 39) 『山岳』3年3号（明治41年10月発行）の雑録に掲載
- 40) 『山岳』3年3号（明治41年10月発行）の雑録に掲載
- 41) 『富山県史』資料編Ⅰ・古代・904頁

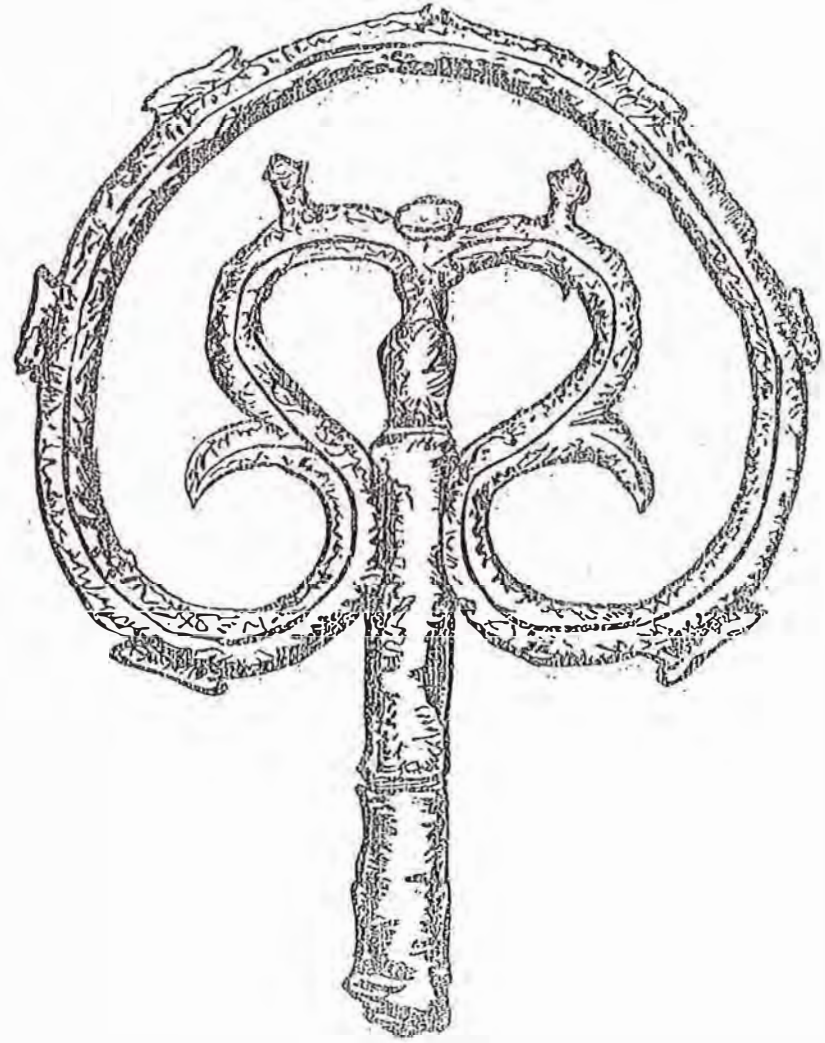
図 1



劍山の頂下にて発見せし槍身（原形二分の一縮寫）

『山岳』 3年3号（明治41年10月発行）の雑録より

図 2



劍山の絶頂にて発見せし錫杖の頭（実物大）

『山岳』 3年3号（明治41年10月発行）の雑録より

(表1) 山岳信仰遺跡の出土品の製作時期一覧

出土場所	出土品の年次幅
金峰山山頂出土遺物	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
金峰山経塚遺物	平安時代 (11世紀)
金峰山寺本堂内遺構出土遺物	平安～鎌倉時代 (11～13世紀)
弥山山頂出土遺物	平安～江戸時代 (12～17世紀)
熊野本宮経塚出土遺物	平安時代 (保安2年・1121)
熊野新宮如法堂経塚出土遺物	平安時代 (12世紀)
熊野新宮神倉山経塚出土遺物	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
熊野阿須賀神社境内御正体埋納遺跡出土品	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
那智経塚出土遺物	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
鞍馬寺経塚出土遺物	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
多度神社経塚出土鏡	平安時代 (12世紀)
求菩提山普賢窟出土遺物	平安時代 (康治元年・1142)
宝満山山麓出土遺物	平安時代 (12～13世紀)
那比新宮信仰資料	鎌倉時代 (13世紀)
白山山頂出土遺物	平安時代 (12世紀)
戸隠山山頂出土遺物	平安～南北朝時代 (12～14世紀)
伊豆山経塚出土遺物	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
大山山頂出土遺物	平安～鎌倉時代 (12～13世紀)
武蔵御嶽神社奉納品	鎌倉～南北朝時代 (13～14世紀)
男体山頂出土遺物	奈良～鎌倉時代 (8～14世紀)
信夫山出土遺物	平安～室町時代 (12～15世紀)
熊野那智神社奉納品	平安～室町時代 (12～13世紀)

那智経塚出土遺物のうち錫杖頭	(平安時代後期・13世紀)
大日岳出土錫杖頭	平安時代中期・9世紀
剣岳山頂出土錫杖頭	奈良末～平安初期
男体山頂出土遺物のうち錫杖頭	平安時代
輪王寺の銅錫杖頭	鎌倉時代 (正応元年・1288)
輪王寺の銅錫杖頭	奈良末～平安初期
信夫山出土遺物のうち錫杖頭	平安後期
蔵王権現像	12世紀～14世紀
銅造立山神立像	鎌倉時代 (寛喜2年・1230)
銅造十一面観音立造	平安時代 (12世紀) 白山登山路「慶松堂」本尊